

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.129

多摩風土記（谷保の城山）

城山と書いて「じょうやま」と読む。J.R南武線谷保駅西方八百m、国立第一小学校の南方にある。居館跡に立ち入ることはできないが、土塁や空堀を見ることができ、菅原道真の子孫津戸三郎為守の屋敷跡等の伝承がある。都田跡・館跡と周辺一帯は東京都歴史保全地域に指定されている。隣接する城山公園にはハケの自然が残されている。（健介）



阿部青鞋と三橋敏雄

— 敏雄の密着癖 —

遠山 陽子

かもめ来よ天金の書をひらくたび
少年ありピカソの青のなかに病む

敏雄
敏雄

昭和十一年、十六歳にしてすでにこのような清新かつ完成された句を作って脚光を浴びた三橋敏雄には、その後長い無発表の時期がある。しかしその間も俳句への情熱は持ち続け、句を作り続けていたのである。昭和四十八年、五十三歳で出版した第二句集『眞神』が世の絶賛を博し、これにより再び俳壇に確固たる地位を築く。

思えば敏雄は昔からこれぞと思う人には徹底的に密着し親炙するという性癖があった。『眞神』において自己を確立するま

での間に敏雄が密着した人々を挙げると、まず勤務先の東京堂の寄宿舎で日夜、十五歳の少年敏雄に俳句というものを教えた渡邊保夫がいる。次いで敏雄が自ら選んで密着したのが渡邊白泉である。これぞ素晴らしい作家と思いつめた敏雄は、彼の押しかけ弟子となる。その白泉の指導を受け、十八歳で作った「戦争」五十七句が山口誓子の眼にとまり、「サンデー毎日」誌上で激賞されることとなった。

敏雄はいったん思いつめるとその人の身辺に入り浸りにならないと気がすまない質だった。敏雄少年が付きまとうのに辟易した白泉は、とうとう敏雄を西東三鬼の許へ伴い、今後は三鬼先生に師事するようにと言いつ渡す。三鬼に師事することになった敏雄は、今度は三鬼に昼夜接していたために、せつかく入社した東京堂を辞め、三鬼の経営する怪しげな会社になり、一人の社員として入社するのである。またのちに高柳重信を知るや、直ちに重信宅の近所の借家に引っ越して、銭湯まで共に通う、というぐあいであった。そうやって敏雄はこれらの先輩同輩たちからひたすら影響を受け、吸収し、或は競い合って、その都度見事に新しい自分を切り開いて行ったのである。

特に昭和十五年、新興俳句弾圧事件で三鬼も白泉も投獄され、俳句発表の場も失った敏雄が俳句への情熱のやり場に苦しんでいたとき、急速に接近することになったのが阿部青鞋であった。このころ敏雄は密着癖を發揮して毎日のように荏原中延の青鞋宅を訪れている。敏雄は二十歳、青鞋は二十六歳で新婚であった。「こんちは」と入って行くと、「おう、今日は三百句だぞ」と威勢のよい声が応じてくれる。敏雄の喪失感はずいぶんよって癒され、さらに俳句への情熱を高めていったのである。

青鞋は、めぼしい学歴がないにもかかわらず独学で、英、仏、中国語に堪能で、唐詩やフランスの詩なども原語でさらさらと読んだ。また日本の古典や漢籍にも通じ、連句、長歌、短歌、詩も書くという驚くべき多才の持ち主であった。室生犀星や萩原朔太郎が選者をしている「句帖」の編集をし、またチクマ書房から出ている文芸誌「車」の編集をするなど、広く文学上の交友を持ちつつ、新興俳句とは違う独特の立場で俳句を作っていた。

梟の目にいつぱいの月夜かな

青鞋

雑巾が大きく颯が熄んでゐる

青鞋

くさめして我はふたりに分けけり

青鞋

かあかあと飛んでもみたいさくらかな

青鞋

青鞋の尺春庵には次第に、起訴猶予となった白泉や清水昇子、小沢青柚子、渡邊保夫なども集まってきて活発な句会が続けられ、さらに白泉の提案で古典俳句の研究することとなった。古いことを知らずに新しいことをやっても駄目だ、もつと基礎を勉強する必要があると気付いたのである。当局から俳句活動を禁止されている今こそ、じっくりと勉強をするチャンスだ。古典を学んで、古典のなさなかつたことをやろうという、

壮大な意気込みであった。テキストは勝峰晋風編『日本俳書大系』全十七巻であった。一晚三百句の句会も続けられ、この頃の成果は青鞋の墨書手書きの句集『尺春庵集・上』に収められている。

淋しさや竹の落葉の十文字

羽音うね（青鞋）

白梅の影おとしたる句かな

雉尾けいび（敏雄）

春かぜやあまくつめたき菓子一つ

仆ふんど兔と（白泉）

逆立つて流れてゆくや彼岸花

吹石すいせき（昇子）

味噌蔵の前をとびゆく螢かな

母屋もや（吐霧）

冬川の速き流や茨の実

三梅さんばい古柚こゆ（青柚子）

暖かやはやての中の紅椿

この手書きの句集を見るだけで、青鞋が非常に面倒見のよい丹念な人であり、カリスマ性を備えた人物だったと判るのである。敏雄は青鞋を深く敬慕し、青鞋も敏雄の才能や人間性を愛した。昭和十七年、敏雄が自宅でささやかな結婚式を挙げたとき、青鞋が仲人をつとめている。

ところで、昭和十七年末に釈放されて神戸へ去った三鬼は、青鞋や敏雄からおり墨書で送られてくる句稿を見て苦々しく思っていた。新興俳句生え抜きの新進気鋭の作家だった敏雄が、古典俳句の俳人になってしまったと、失望落胆したのである。しかし、「まだ鬼貫をやっておるのか」という三鬼の杞憂が無用であったことは、後の敏雄や青鞋の句を見れば歴然としている。この時の古典研究が、以後の敏雄俳句の確立のためにいかに重要な要素のひとつとなったか、計り知れないものがあるのである。

その後、戦争、敗戦を経て横須賀海兵団から復員した敏雄は昭和二十一年、青鞋の知人の紹介で運輸省航海訓練所に就職す

る。以後二十六年間、練習帆船日本丸や海王丸などの事務長として海上勤務を続けることとなる。

昭和二十三年、三鬼は山口誓子を擁して「天狼」を創刊する。同時に「激浪」(のちに「断崖」という三鬼指導の雑誌も創刊するが、敏雄はこれらへの参加を拒む。このころ敏雄は、三鬼が非常にがっかりしたという古典俳句を、まだ大いに自負心をもって作っていた。この時点では、両者の間にはまだ理解し得ぬ溝があったのである。

梟の顔あげてゐる夕かな

敏雄

かまど火の映りてうごく冬の家

敏雄

組み合ひて降つてくるなり牡丹雪

敏雄

この頃青鞋は、美作の国巨勢の里に疎開したまま、村の文学青年たちに慕われ、巨勢村文学研究会の講師となり、小説短歌俳句にわたって講師をつとめていた。昭和二十三年から三十年ころまで、敏雄は船上から巨勢の青鞋へ頻繁に手紙を送っている。船上で作った俳句や独吟歌仙への批評を乞い、或は青鞋の作品の鑑賞や感想を綴り、また作句上の悩み、はては生活上の心境吐露などなど、縷々と、また綿々と綴られた筆書きの長い長い手紙である。青鞋もラブレターのようなこれらの手紙に、誠実によく応えている。

一方敏雄は、船が神戸に入港するたびに三鬼を訪れ、三鬼の雑誌「断崖」の人々とも交流していた。実は、三鬼流の新興俳句と青鞋から学んだ古典俳句との狭間で、敏雄はずっと苦悩していたのである。長い船上での思索を経たのち、敏雄はついに昭和三十一年、意を決して「断崖」と「俳句」に作品を発表する。

古典を知ってみると、新興俳句の幼さが目につくようになった。古典の型を練習してから、より緊密な言い回しが身につく

以前の句の未熟さが判ってきたのである。また季語の重要性を深く認識したという経験は、再び無季俳句を作ることになったとき、季語以外の言葉や主題を選ぶ重さと困難さをより強く知り、無季俳句が成功して有季俳句に優る句が出来たときの喜びを知ることとなった。

昭和四十八年、句集『眞神』において敏雄は主題と手法の見事な転換を見せる。新興俳句の新しさを求める精神と古典の古格を備えた、他に類のない俳句世界を作り出し、世を瞠目させたのである。長かった船上の苦悩が実を結んだのだと言えよう。

昭和衰へ馬の音する夕かな

敏雄

たましひのまはりの山の蒼さかな

敏雄

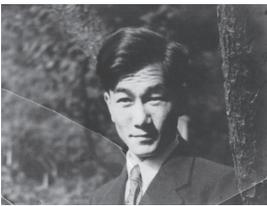
絶滅のかの狼を連れ歩く

敏雄

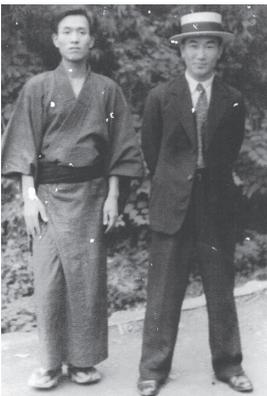
鈴に入る玉こそよけれ春のくれ

敏雄

以後敏雄の評価はあがり続け、平成元年六月、『壘の上』で蛇笏賞を受賞する。無季俳句作者の初めての蛇笏賞受賞であった。阿部青鞋との出会いも、賞をもたらした大きな力の一つであったと言えよう。その平成元年二月、青鞋は都下東村山市の次女宅で没している。



阿部青鞋



三橋敏雄(左)と阿部青鞋

あけぼの集

老の身の行く手果てなき枯野道 東久留米 青村 萌生
 裏表なき人とみて 朴落葉 国分寺 秋山ふみ子
 寄り添ふて十一月の鏡かな 狛 江 浅見 玲子
 金鼓打つ南無南無無やこぼれ萩多 摩 足立喜美子
 かまつかやぐるりと目鼻なき世間小 平安達 昌代
 霜月や飛ばない鳥が走りだす清 瀬 穴原 達治
 柿吊すおとこ寡黙で優しくて 稲 城 新井 温子
 北浅川数ふ魚影や小六月八王子荒川勢津子
 愛を歌ひ十二月八日撃たれけり多 摩 有坂 花野
 夕凍みのかかるとに浮力鴨の陣 国分寺 安西 篤
 断水の知らせポストに冬隣多 摩 石川 春兔
 单身赴任の夫と二人の冬北斗小 平 石橋いろり
 何するも先ずひとり言冬に入る 練 馬 石原 俊彦
 薦紅葉廃れ工場の壁のぼる青 梅 一ノ瀬 順子
 凧といふ大きな季語の気配かな 狛 江 伊東 類
 のぞみ停まらず背高泡立草調 布 糸布 みこ
 神の留守家に富山の置き薬町 田 稲吉 豊
 船繋ぐ湖へ流るる冬紅葉 練 馬 岩崎清太郎
 鴉鳴いて朝の眼覚めを明るくす 東村山 岩田 夏恵

広島海のぎらつく敗戦日小 平 植竹 利江
 山茶花や教へ子逝くとまた便り 東久留米 上原 重一
 大寒や独り暮らしに言葉掛け町 田 宇賀いせを
 麴の香卓に充つ 蕪汁 小金井 浮海 早苗
 断ちがたき縁のごとくりンゴ剥く 西東京 内田 牧人
 冬の鯉ぶつかり合ふもやはらかに 武蔵野 江中 真弓
 幻術の寒月光は 蛻ぬけがらに府 中大井 恒行
 狐火や豚珍軒の中華そば日 野 大槻 正茂
 お茶の花袱紗にかくす意地少し立 川 大友 恭子
 落葉乗せ子供を待てる礎石かな三 鷹 大森 敦夫
 ヒロシマの希望ICANと除夜の鐘 昭 鳥 岡崎たかね
 カロス・ゴーン書棚のマルクスめくる寒夜 武蔵野 岡崎 万寿
 銀杏を踏みたる不覚初デート 小金井 岡本 久一
 立冬の犬の頭とスニーカー三 鷹 小川 葉子
 長ながと電話勤労感謝の日 国 立 長田 和江
 パトカーの赤色灯や賞与月 国 立 折原あきの
 名を持たぬいのちの匂ひ立つ夜長多 摩 柏田 浪雅
 故郷の広き懐柿実る 国分寺 加藤 道代
 それぞれの余白を想う年賀状 稲 城 門野ミキ子

あけぼの集

跳ね橋の下流れゆく冬の影西東京 金谷サダ子
 人の声いよよいとしき神無月日野 亀津ひのとり
 行く秋や亡き名優の笑う画面西東京 河 順子
 天平の歴史綾なす落葉踏むさいたま河井 時子
 いにしえはいにしえとして秋祭る立川 川島 一夫
 小春日和居眠りよりスマホかな稲城 川田 忠雄
 こころ冷え世辞の属性そこかしこ太田 川名つぎお
 傘寿とふ末広がりの秋祝ふ調布 菅 さだを
 冷やかな動悸鎮めて髪を切る清瀬 神崎 幸子
 初蝶の決めかねている飛ぶ高さ小平 城内 明子
 菊日和無の字の多き経写す武蔵野高坂栄子
 秋晴や空弁食べて母見舞ふ東村山 五藤 航
 大根のおでんが好きで無党派層西東京 小山いたる
 しぐるるるや刀剣展の出入口町田 小山 健介
 寒月を容れるには良き空袋西東京 近藤 斗升
 うみんちゆ静かに拳揃えけり立川 今野 修三
 鳥渡るヴィオロンひとつの大道芸多摩 齊田 仁
 通る度挨拶のごと萩ゆるる東大和境英子
 千人針かく挿したるか赤い羽根八王子櫻本 愚草

松茸の話に遠く水使う東久留米 佐々木克子
 時代遅れの貌をして寒の鯉府中 笹木 弘
 藁塚や紅き火星を兜太とも八王子佐藤 健
 菊日和人混みを抜け人になる調布 佐藤 茉
 門扉なき全生園に小鳥来る昭鳥 佐藤 光子
 秋桜ぽかんと仁王見比べる府中 佐藤八重子
 よいとまけの形して編む雪囲い青梅 沢田 改司
 口切の躡り口よりはじまりぬ八王子柴 れいこ
 もうすこしながめていたい冬桜昭鳥 芝崎 綾子
 月浴びて生命線が伸びてゆく練馬 島 彩可
 飽食に慣れて育った稲すずめ足利 清水 弘一
 遠山に耳敏くして冬支度新座 清水万ゆ子
 はさがけの赤かぶ五段手から手へ西東京 白尾 幸子
 午後三時歳暮持ちちくる悪魔かな調布 白戸 麻奈
 円空仏に似る松茸や笑み給ふ世田谷鈴木 浮葉
 三ヶ月ごとの検診秋深む立川 鈴木かずえ
 子等びよんぴよん鴉びよん小春かな小平 鈴木 寿江
 銀杏散る時間の束を恐れつつ練馬 鈴木りつ子
 短日の溶けあつてしまった接吻町田 栖村 舞

あけぼの集

目鼻口耳がもの言ふそぞろ寒板 橋 諏訪部典子
 軍手はき今日は団地の秋仕舞東村山瀬尾 惠澄
 取説の時刻合せや冬支度小 平 関 梓
 赤城山関八州の冬を告ぐ町 田 関根 曳月
 一睡の中を幾たび桜咲く武蔵野高野 公一
 墓洗ふ父溺愛の犬連れて清 瀬 谷村 鯛夢
 台風の当る予報が憎くなり西東京玉井 吉秋
 ひらひらと落ち葉舞い散り三段跳び 稲 城 玉木 康博
 ローソクの火に話しかけ白秋忌日 野 玉木 祐
 人並ぶ老舗の角の菊日和調 布 田村 清子
 冬桜みんな憂ひを含み咲く東久留米 田村 實
 探し当てし写真一枚寒の明け三 鷹 田山 光起
 鴨下りて蒼天の水遊ばせり稲 城 地原 光夫
 多摩源流凍てつく滝を遡る八王子辻 升 人
 大輪の花鮮やかに冬火花八王子都筑 遊
 懐に鳥獣保護区山眠る東村山寺尾 令子
 霜の声むくろの臉下ろすとき立 川 遠山 陽子
 夕暮て厨に葱を刻む音西東京戸川 晟
 いびつでも佳き名をもらいら・フランス杉 並 飛永百合子

柿剥いて憎き碁敵待ちにけり相模原鳥海 高志
 煮崩れぬやうに鯛を寝かせけり清 瀬 永井 潮
 黙深き宮居の杜に笹子鳴く町 田 長澤 義雄
 奥多摩や空の果てまで鯛雲八王子中島 秀次
 黄落やぼつんと立っていたい辻小 平 中條 啓子
 冬紅葉想ひの丈の瓦紋西東京中田とも子
 懐手などしておれぬ竜馬像国分寺中野 淑子
 刈田もう風生む「力」無くなれり座 間 長野 保代
 冬桜咲くや人類滅亡史青 梅 中村ゆき子
 通勤の車両込み合ひ冬めきぬ武蔵野夏目 重美
 石の間に生ひ冬董なに唄ふ八王子夏目 瑤
 ひと去りてひと帰り来ぬ師走かな町 田 成戸 寿彦
 山粧い華岳の山へ続くごとし昭 島 西村 智治
 隣室は空氣の境目今朝の秋多 摩 拔山 裕子
 賞品は地元野菜の運動会三 鷹 根岸 敏三
 秋風や元号のなき手帳買ふ三 鷹 根岸 操
 棺の中菊積むごとに遠くなる小 平 野口 佐稔
 水切りの秋夕焼をはじき飛ぶ青 梅 萩原 芙沙
 門火焚くを忘れしに非ずただ祈る東大和橋爪 鶴磨

あけぼの集

暮れなずむ春の瀬音のアンダンテ 武蔵野 蓮見 順子
 春寒やまだ見つからぬ青い鳥 武蔵野 蓮見 徳郎
 歳時めくる秋は駈け足で行ってしまった羽 村花貫 寥
 忘却とは十二月八日奥歯噛む川 越原田 麦吹
 霜月や旅に購うお線香青 梅樋口 光江
 高窓を開けば流れこむ銀河多 摩平山 道子
 四十七士の墓ひとつずつ蜜柑置く横 浜藤井 みき
 新米に美ら海ちのの塩にぎり飯鎌 倉藤倉 頼江
 クレオパトラの夢よピアノに枯葉ふる練 馬淵田 芥門
 ロボット犬遊ぶ小児科小鳥来る調 布藤原はる美
 晩年か蝶舞うように散る木の葉多 摩星野 幸子
 紅葉滝見て来しひと皿洗う羽 村堀部 節子
 拉げても種茄子にある存在感羽 村堀部 嘉雄
 草紅葉水かけ論に水をかけ国 立前田 弘
 ボジョレー・ヌーボーやはり築地の玉子焼木更津 松本 まり
 月明りたとえば君のやさしさ八王子 松元 峯子
 満月に完璧主義を笑われる 東久留米 三池 泉
 秋夕焼砂場にもっと居たいよね 東久留米 三池 しみず
 道のべの祠に宿る時雨かな 小金井 三浦 土火

レグホンの飛翔願望昼の月町 田三木 冬子
 餅花や今は火のない囲炉裏端 国分寺 水落 清子
 雪催ひ現し世の闇濃かりけり 三鷹 水野 星閣
 ぺかぺかとネオン糸瓜の水取れり 日野 満田 光生
 林檎ジャム透きとおりにけり薄日さす 小金井 宮井 洋子
 いずれ行く坂の途中の落椿 昭島 宮腰 秀子
 猫笑うそんな日和の石路の花 小金井 村井 一枝
 足首に予感能力風邪になる 武蔵野 望月 哲土
 父母にもっとも近き初御空立 川山口 楓子
 かたわらに時間が浮いて石路の花町 田山崎せつ子
 かはたれ時の風の重さや波郷の忌 東村山 山崎美紗緒
 島からの賀状海神わたつみのせて来し府 中山本 徳子
 多摩樹間雲茜して四方暗し多 摩山本みつし
 いく度も月の枢の窓ひらく府 中吉澤 利枝
 実たわわ楽しき夜なべつるし柿 東大和 吉田雄飛子
 眼裏にニッポニア・ニッポン冬の海 東久留米 吉平たもつ
 一陣の風に素直や枯芒 国立 吉村春風子
 逆さまに干さるるシャツや小六月立 川米澤 久子
 こころもち伸びて晴着の成人祭 青梅 渡部 洋一

穴原 達治

虫の音をはさんで閉じる文庫本

大友 恭子

多くの虫達の鳴く声は、それだけで静けさを感じられる。気忙しい日常の中にあつて、ふと本を開く時は至福の時間である。わかりやすい句だからこの時間と空間は共有できる。誰でもスツと入りこめる次元は心に残る。

一ノ瀬順子

虫の音をはさんで閉じる文庫本

大友 恭子

虫集く長き秋の夜。一人暮らしの徒然の読書であろうか。上五から中七の表現が発見である。「葉」になったのは「虫の音」。女性らしい細かな感性が働いている。目を閉じて虫の音の中を夢路に入つて行くのだから。

平らなり二百二十日の成層圏

関根 曳月

一瞬の虚を衝かれた。大型台風が多い年であったので尚更だ。台風と云つても所詮地表10キロ程度の対流圏での出来事。大きな視点で物を見れば遠観に近い感慨も湧いてくる。「虫の夜の星空に浮く地球かな」大峯あきらーに近い感覚。

過労死の蟻一匹に蟻集るたが

岩崎清太郎

永井 潮

死、集る。大分以前のことだが、鳥が数羽電線に止まって頻りに下を覗いていた。電柱の根元に鳥が横たわつていて、上空を夥しい鳥が声を張り上げ舞つていた。掲句、共同生活を営む社会性昆虫の働きの蟻の死を過労死と言ひ切る作者。納得。

内田 牧人

軒のなき大東京の大夕立

谷村 鯛夢

夕立からは、突然・雨宿りと連想が働くが「軒」が出てくるのは昭和中期生れ迄でしょうか。武蔵野の雨宿りと言えば道灌の「糞ひとつだになきぞ悲しき」の山吹の花に連想が繋がる。軒深い家が並ぶ道は今ももう無い。想像の拡がる佳句。

水打つて父の世よりの風を待つ

佐々木克子

あまりの暑さに「打ち水」を試みた。エアコンの風とは違う涼しさを求めての一時。自ずと父と共にありし遠い日のこと、故郷の山河などが思われたことであろう。涼を待つ静謐な心の佇まいに惹かれる。打水が日常の習慣とされていらない現代の句である。

衣斐ちづ子

押せばごろん叩けばぼこんと冬瓜

岡本 久一

頂き物の冬瓜を初めて見た時、淡緑でありながらドーンと重量感の有る楕円形の食べ物に驚いた事がある。作者は押ししたり叩いたりしてみた、その時のごろん、ぼこんの擬音語は冬瓜の有り様を実に見事に捉えていて感服致しました。

大井 恒行

草紅葉ふいに足許から笹

前田 弘

一行縦書きの生理、垂直性をよく生かしている。草紅葉と書かれながら、頭上の紅葉が残像としてある。そして足許に思いが到ると、急転して笹が発生し、逆に体の中を昇つて行くように感じるのだ。想像力の賜である。

手おくれと思ふあれこれ梅雨の蝶

夏目 瑠

他に「手遅れと思ふあれこれ夏の蝶」嵐去り忿怒のごとき雲の峰、蝶の句で二句、雲の峰で一句、一読し山あり谷あり越えてきたこの二、三か月の人生。鎌倉吟行以来、瑠さんのお人柄と物知りで柔らかい語り口、それぞれに生きる若さが感じられます。

稲吉 豊

江中 真弓

大友 恭子

稲妻の狙ひ定むる夜の鉄塔
大森 敦夫

夏目 重美

遠くで眺めている分にはなかなか奇麗な稲妻も、闇の中、閃光と轟音が同時に来襲したときには、肝を冷やします。この句では、夜の鉄塔を「狙ひ定むる」という表現がとも効いており、美と恐怖の表裏が見事に表現されています。

大渡ルリ子

一山の紅葉のみこみ湖朱し

河井 時子

一山の紅葉が水面に映るではなく、湖が「一山の紅葉のみこみ」と大胆に言い切ったことで、湖の水深と透明度の高さを感じられる句に仕上がったと思います。

小川 葉子

雲の峰ついと戦に突き当る

柏田 浪雅

作者が雲の峰を越えた途端、或は雲の峰自体が高さ故に、いきなり戦火に出くわしたのだ。世界のあちこちがキナ臭い。「一寸先は戦」の時代が迫っている。雲の峰の向こうは戦国時代であった、とドラえもんの世界であって欲しいものだ。

竹夫人母にたてがみあるを知る
岡崎たかね

日野 百草

「比翼の籠」などとも称される優しいイメージの抱き籠。馬や雄のライオンを表わす「勇者」のたてがみ。母の優しさに包まれていた作者はある時、父よりも強い母の一面をまざまざと知ることになったのだろうか。考える一句。

岡崎 万寿

秒針の音のみ冴える八月は

抜山 裕子

何十年たとうと広島、長崎、そして敗戦の八月。沢山の人々がもがき死んでいった。それぞれの感慨は深い。そんなある日、ふつと秒針の音だけの静寂な世界に一人いる感覚になる。かえって八月が胸に染みてくる。冴えた八月観。

折原あきの

特売が枕詞の秋刀魚買う

望月 哲土

農業も漁業も自然が相手。人間の知恵や努力の及ばぬ流れで収穫（獲）が左右される。去年不漁であった秋刀魚は、今年豊漁だそう。又脂ののりも良くて、新鮮で美味い。タイムサーピスのスーパリーの焼きたて秋刀魚は格別なもの。

茄子の花一番遠い昨日かな
柏田 浪雅

白尾 幸子

一番近い筈の「昨日」を「一番遠い」と言う。ふつと時間の帯の中の自分に戸惑っている作者。茄子の花だけが色鮮やかに見守ってくれている。

宇宙の深奥に迫る一句。

門野ミキ子

地球儀の埃を拭う原爆忌

島 彩可

広島、長崎への原爆投下から七十三年。核廃絶どころか、人災、天災の跡を絶たない地球である。地球儀の埃を拭うように地球も丸ごと拭えたら、平和な地球、クリーンな地球になれる筈……。平和への願いが静かに伝わって来る一句です。

金谷サダ子

鳥の巢に鳥いる平成最後の日

大井 恒行

鳥の巢に鳥のさえずりを聞く、穏やかなひととき。もう平成の秋はない。激動の昭和を生き抜いた身には、新鮮な躍進の続く平和な日々。新しい年号の下に、どんな世の中が展らかれるのか。戦争だけは避けたい……。しみじみと想わせる句。

河 順子

マイカーを手放す老よ能登薄暑

植竹 利江

作者は、まもなく自動車の運転を止める決意です。思い出として白米千枚田のある能登を訪れました。青い海と天へ広がる棚田に見入る姿に、今年廃車した私も、しみじみ感じ入りました。

河井 時子

虫の音をはさんで閉じる文庫本

大友 恭子

自分の大切な文庫本。虫の音も聞える心静まる至福の時間を了えて、再びこの文庫本を開く時に、この刻を共有する為を願う虫の音も一緒に閉じたのです。素敵な時間でした。おだやかな作者の様子に共鳴出来ました。

神崎 幸子

穏やかにそして普通に冷や奴

加藤 道代

穏やかに、普通であるくらし。若さが漲っていた年代は別として、人生の後半を過ごすのこれほど豊かな生き方はあるでしょうか。周りの人々にも付かず離れずの近い距離を保って心を通わせます。今日は昔ながらの冷や奴に舌を遊ばせながら

城内 明子

抑せばごろん叩けばぼこんと冬瓜

岡本 久一

多忙な氏がふと厨の冬瓜に目を留める。大器なのか、愚鈍なのか決め兼ねるその在り様に、何を見、何を考えたのか。応答せぬ冬瓜に対し、暫し諸々自問自答していたのではないか。そして我に返って煙草を一服。

小渡 稔

穏やかにそして普通に冷や奴

加藤 道代

冷奴は日本人の庶民生活の中から生れてきた夏の料理である。いま作者は平穏な生活に浸りながら冷奴を食べている。なんの気負いもなく普段どおりに食べている。ここには作者の真摯な人生観が感じられる。私もこんな余生を持ちたい。

小山 いたる

八月や何もなかつたやうに海

中村ゆき子

日本人にとつて、いや人類全てには、八月は決して忘れ得ない月。八月、原子爆弾を使われ廃墟となった都市は二つ。そして数多くの死者、被爆者として今も苦しむ多数の人々。だが、何も知らぬ氣に静かに佇む青い海原。季節はもう秋。

高坂 栄子

何もできずただ青い八月の空

山崎せつ子

八月というとまず終戦や原爆のことを思い浮かべる。そんな事はいつさい言わず、八月の空を見て「何もできず」と無常観を述べている。ただ青い空には希望があり、すつきりとしているが想像のふくらむ句である。

五藤 航

組板のリズム正調秋立ちぬ

原田 麦吹

夕餉の支度、奥さんのよく切れる包丁で野菜や漬けものをトントンとリズムカルに切っている音とともに、作者は今年の猛暑だった夏から、立秋の清々しさを感じている様子が読み取れます。中七が生きている佳句です。

佐々木克子

虫の音をはさんで閉じる文庫本

大友 恭子

秋の夜長、どんな本に夢中になっていたのか。ふっと疲れを覚えて我にかえった時、窓の外から虫の音が聞こえてきた。さて今夜はもう休もうか。虫の音も一緒に閉じた本。次に読む時きつと鈴虫が鳴きだすかも。感性豊かな句と思った。

地球儀の埃を拭う原爆忌

島 彩可

佐藤 光子

成人された子供部屋の地球儀かもしれない。たまった埃を払うのではなく、拭ったのだ。今も戦争をしている国が球面に鮮明に浮かび出た。

先ゆきに不安のある今、大きな犠牲を払って得た平和を守らねばの思いに共感。

清水万ゆ子

茄子の花一番遠い昨日かな

白尾 幸子

昨日が一番遠いと言い切ったのがいい。それにこれ以上平凡過ぎる茄子の花を持って来た。目立たない茄子の花は、それでもよくよく見ると、何とも可愛らしい。急に遠ざかった昨日が近づく。やはり茄子の花は遠い昨日を引き寄せる何かを持っている。

関 梓

スーパームーン鏡餅が飛びたがる

高野 公一

昨年の一月二日はスーパームーンが出た。床の間には鏡餅が正座している。微動だに出来ない鏡餅は引力を振り払い、美しい月に近づきたいと願う。遠く離れた二つの球体は宇宙でランデブーする、その大らかな飛躍に惹きこまれました。

夏座敷鴨居に並ぶ肖像画

中島 秀次

谷村 鯛夢

上五と下五、両方に「物」を置いただけで、他に何も言っていない。が、そこにこの中七を挟むだけで、何代も続く旧家の大きな構え、仄暗い座敷の重たい空気感、久しぶりに帰省した作者が額の傾きを直している姿まで伝わってくるから不思議だ。

玉木 祐

点鬼簿をとび立つ気配黒あげは

安西 篤

点鬼簿は別名過去帳、とすると実家の菩提寺を思い浮べる。とび立つ気配とは同胞の死の直前を思う。黒あげはを仮名文字として女性を思わせる。作者が解ると妹さんの追悼句だ。思いの籠るお優しい作者の心情があふれている。

辻 升人

過労死の蟻一匹に蟻集る

永井 潮

日産の功労者カルロス・ゴーンの話題が今まさに世情の中心を賑わしている。ゴーン氏の元で過労死又は過労死寸前の人は何万人といたのである。今後も過労死の蟻はなくなる事はあるまい。己も過労死の蟻を目指して鼓舞し続ける。

なまくらな包丁叱り南瓜切る

一ノ瀬順子

都筑 遊

近頃、スーパーでカット野菜が売られているが味気ない。自分の好みに切って味付けした煮物は格別である。ところが、掲句では、肝心要の包丁がとんと役に立たない事態に。作者の思いが伝わってくる。果たして出来上がりは如何に。

遠山 陽子

父にある行きつけの石青葉風

三浦 文子

「行きつけ」という言葉がいい。少し老いた父は、いつもの野道を散歩しては、いつもの石に腰かけて一休みする。青葉風に吹かれつつ石に腰を下ろした父の姿は、いとしくも懐かしい風景として、いつまでも娘のまなうらに残るのである。

飛永百合子

水打って父の世よりの風を待つ

佐々木克子

子どもの頃は庭掃除も仕事の内の一つで、夕方になると自分より背の高い竹箒で庭掃きをした後、夏場は必ず如雨露で水まきをしたものです。今は、庭もない暮らしですが、通路に水を打っていると作者のような気持ちになってきます。

神の座の青き稜線野分行く
中條 啓子

小山 健介

青々とした稜線に神々が座し、ふもと
の原野を野分が吹き抜ける。山々、原野、
川、ところどころに森……たったそれだけ
の太古の風景。人はまだ、居ない。
莊嚴、雄大、清涼な世界に、心が大きく
膨らむ。

根岸 敏三

薄暑かな改札口へ四十段

河 順子

初夏の暑さが増してくる頃、年齢を重ね
てくると階段を上るのがきつくなつてく
る。時には手すりにつかまっただけの事も
ある。季語「薄暑」に対して「四十段」と
具体的に数を言ったのが面白い。

軒のなき大東京の大夕立

谷村 鯛夢

高層ビルの立ち並ぶ大都会には、軒先は
ない。夕立が来たら、袍を頭に掛けて駅に
逃げるしかない。軒先で見知らぬ人と言葉
を交わすこともない。恋が生まれるかもし
れないのに。大東京が映画のワンシーンの
ように描かれた。

根岸 操

水葬の毛布一枚のこりけり
橋爪 鶴磨

吉澤 利枝

恐ろしい一句である。先の東北地方の大
地震火災・津波への思いが深まる。どこか
に救いが無いかと感傷の幅を拡げてみた
が、すべてを投げ出された人の姿が見え、
深い哀悼の思いに加え、共鳴するものであ
る。

廣瀬 孝子

ケープルの六分間の青葉騒

宮腰 秀子

さわさわと青葉を感じながらケープルが
登っていく。全身を青葉に包まれながら。
たったの六分間でも素晴らしい心地でした
でしょう。青葉との会話も聞こえそうです。
六分間が効いていると思えました。自然に
よって人は癒されていると思えました。

淵田 芥門

草紅葉ふいに足許から笹

前田 弘

前衛俳句は難解だ。庭中の青鮫も狼に虫
も初学にはカオスだ。だが、この句、抽象
性の暗喩を解けば深く染み入る。笹は嚴父
の叱声か慈母の童歌か。晩秋の郷愁は老が
境涯。遙かの過去が足元から、混然たる声
となり視覚となって迫り来る。

千葉産のブス梨の味が一番
松本 まり

田村 實

木更津梨の出来はその年の天候に左右さ
れる。産直販売の梨畑では、朝もいで、午
後からは沢山の人が集客。奥では選別のコ
ンベヤーに、いびつなや、傷ついたのが
はじかれている。おつりの掌に、必ず一こ
おまけを載せてくれる。

水落 清子

蜻蛉より小さき赤牛草千里

内田 牧人

大景を詠まれていることにまず心惹かれ
ました。目前の小さな蜻蛉から景がぐんぐ
んと広がってゆく心地良さがあります。
草千里を流れる豊かな時間を共有させて
いただきました。

満田 光生

過労死の蟻一匹に蟻集る

永井 潮

死んだ働き蟻に集る働き蟻。仲間を餌食
にする蟻の非情さ。しかし「過労死」は作
者の主観。蟻を見て、人の世も同じと思っ
たのだ。遺族が声を上げなければ、「かわ
いそう」で終わり。自分さえよければ、と
いう人間の無情さを思わせる。

色褪せし配給通帳八月来

宮腰 秀子
藤原はる美

八月と言えば原爆か終戦句の多い中で配給通帳とは意外だった。作者は通帳を大切に保管されていたのだろうか？戦中戦後の物資の乏しい時代を、殊に女性達は苦勞を強いられ生き抜いてきた。二度とあつてはならない八月、実感のこもった佳句。

蠍座や畑にばつくり洞窟の口

吉澤 利枝
満田 光生

蠍座は盛夏の夕刻に地平近くに南中する星座、蠍という語感、洞窟の口と言う言葉で、沖繩の激戦地摩文仁やひめゆりの塔と結びついてしまった。エメラルドビーチの美しさが哀しかった。涙と折りの旅。蠍、ばつくり、洞窟と言葉の迫力がある。

☆ホームページで速報記事を

現代俳句協会のホームページに、当地区協のお知らせや月例会の報告等が、毎月更新されて載っています。

(蓮見幹事担当)

(アクセス方法)

「現代俳句協会」を検索し、ホームページから(地区活動)↓(北海道・東北・関東)↓(都多摩)と進んで下さい。

あけぼの便り

○この度入会させていただきました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(石川春兎)

○郷里も職場も同じだった友人が隣町にいて、実家から毎年見事な洪柿が届きます。今年は20個程干し柿にしました。甘くなるかなと毎日見えています。

(一ノ瀬順子)

○いつも有り難うございます。自分は怠けていながら会報が来るのを待つています。わが身のやる気のなさに呆れていますが、人様の句を拝見するとやる気が出て二三句は出来ます。不勉強さに呆れていますが、句作りは楽しいです。

(岩田夏恵)

○研究会、吟行会などの地区協会の活動に参加できず、遠ざかっていますことをお詫びいたします。

(内田牧人)

○父を64歳、母を78歳で亡くし、目下15歳の愛婆犬を慈しんでいます。14歳まで良き散歩友達だったのですが、今はよちよち歩き。寒さで元気に歩行距離、時間を伸ばしています。私に時間を下さい。

(小川葉子)

○拙句「麦熟れて『東方見聞録』の国」を前号で望月哲士様がお取り上げ鑑賞下さいました。誠に嬉しくお礼申し上げます。

(折原あきの)

○身は現住所に、頭の中は宇宙に、世界に、非現実的に、幻想に、江戸に、戦国時代に。頭の中は小学生でなく、オリンピッククラスの水準を。てな覚悟で、世辞なき本音で次世代に加勢。

(川名つぎお)

○小生も男子の健康寿命に達するようになりました。週三回ジムで泳ぎ、体力維持に務めています。

(五藤航)

○前号で私の「紫木蓮」の句を鑑賞して下さいました新井温子様、有り難うございました。これからの励みになりました。

(境英子)

○皇帝ダリアが咲き続け、ミカン、キンカン、ネーブル、シークワーサーがたわわに実っています。温暖化の恩恵に浴しております。

(清水弘一)

○作句を始めて七十年近くなり、現俳会員歴も三十年余りになるが、今は惰性で続けている。会員の皆様のご活躍を期すばかりである。

(地原光夫)

○秋はなんとなくもの哀しさ、寂しさを感じる季節ですね。しかしはらはらと散る

落葉の親の木にはすでに冬芽が育っています。自然は偉い。人間は、自分は大丈夫かな？と考えてしまいます。

(飛永百合子)

○前号で拙句を一句鑑賞にお取り上げ下さった、秋山ふみ子様、原田麦吹様、日野百草様、誠に有り難くお礼申し上げます。(永井潮)

○先ごろ三鷹市の文化祭で行われた俳句会には、当地区協会員をはじめ多くの人が参加しました。(根岸敏三)

○役員の方皆さん、編集部の方皆さん、いつもお世話になっております。向寒の折柄くれぐれもご自愛ください。研究会にはなかなか出席できないのですが、今後ともよろしくお願いいたします。(野口佐穂)

○この頃は身体に自らむちを打って生きています。(花貫蓼)

○この夏の酷暑ですっかり体調を崩してしまいました。ようやく元に戻りつつあります。九十三歳は少し長生きをし過ぎたようです。(原田麦吹)

○前号で拙句をお採り上げご鑑賞下さった中田とも子様、有り難うございました。まだ俳句を続けてみようかなと思います。(星野幸子)

度に、魅力的な天平時代が浮かびます。はるか遠方に住み参加出来ませんが、皆様のご盛会を祈念致しました。

(松本まり)

○山法師や花水木の紅葉が散り始め、日暮れを急ぐ晩秋の庭に何かと思いはつたります。先ずは納得の一句を…。年齢的にもころばぬ様にながらばり度いと思えます。(三木冬子)

○最近、親友の一人が急に亡くなり、驚くと共に我が身の明日もどうなるかわからないなと思いました。(宮井洋子)

○とつくに八十歳を過ぎ、あちこち故障だらけの日々。何とか頑張っています。(吉澤利枝)

○宮寺幸子様、128号で拙句を取り上げ鑑賞いただき有り難うございました。大変うれしく思いました。これからの励みになります。(渡部洋一)

**現代俳句「列島春秋」二〇一八年
掲載作品紹介**

現代俳句協会の月刊誌「現代俳句」は、

て掲載しています。昨年度当地区からは次の諸作品が選ばれ誌面を飾りました。

1月 ポストでは猿の押し合ふ年賀状 櫻本 愚草

2月 東京の地下の幾層冴返る 秋山ふみ子

3月 曲げられぬものに生き方松の芯 藤井 みき

4月 花疲れワインの栓がころがつて 山口 楓子

5月 通夜の席一人は登山靴のまま 冬木 喬

6月 あれこれと迷はずまづは胡瓜もみ 水落 清子

7月 頑なに生きやわらかく端居する 佐々木克子

8月 秋立つや折目の多き山の地図 小山 健介

9月 産み月の嫁からメール小鳥来る 石橋いろり

10月 つめたくてぬくき手ざりは今年米 水野二三夫

11月 沈む日に映ゆる岬の干し大根 河井 時子

12月 遺影からはじまる母のすすはらひ 沢田 改司

武蔵国分寺界隈吟行記

平成三十年十一月十七日(土)

立冬を過ぎ、時雨模様も止むを得ないかの予想も見事に外れ、当日は冬青空の広がる絶好の吟行日和となった。

参加者二十六名、午前九時三十分、JR西国分寺駅改札口に集合した。吉村春風子会長の挨拶、石橋いろり担当幹事のスケジュール説明の後、一組は東山道武蔵路跡方面から、もう一組は伝鎌倉街道方面から、二手に別れて出発した。

武蔵国分寺界隈は、天平以来の千年を超えてる歴史ロマンと、国分寺崖線の湧水に育まれた多様な植生とが絡み合い、四季折々に絶妙の句材を提供する。都立国分寺公園、湧水の流れに沿うお鷹の道、真姿の池、分倍河原の戦いによって焼失した武蔵国分寺跡、武蔵国分尼寺跡、七重塔跡などの名跡を廻り、旧本多家住宅長屋門、武蔵国分寺跡資料館、史跡の駅「おたカフエ」辺りで二組は合流した。思い思いの作句と昼食の後、新田義貞再建という薬師堂跡の医王山国分寺、同境内の万葉植物園・仁王門・薬師院、楼門などを訪ねながら、出句

締切の午後十二時三十分を目指して句会場へと向かった。

句会場は、駅近くの東京都立多摩図書館二階会議室、建物や施設の斬新さのみならず、人の集まる温もりを感じさせる、多摩地域自慢の施設である。午後一時の会議室開場まで、提出を終えて余裕の人、出句用紙に記入する人、清記する人など、三十分は瞬く間に過ぎた。囁目句二句提出、五句互選、根岸操幹事による披露が行われた。点盛と順位の確認がなされ、活発な句評の後、作者が公表された。終始笑いの絶えない、時に緊張感のある相互研鑽の貴重なひと時となった。高得点句上位十句を入賞とした。同点句の場合は清記順、二句入選の場合一人一句を入選とし、次点句に譲った。また特別選者による特選賞が授与された。午後四時三十分、会場の片づけを終え、一日の余韻を胸に刻んでそれぞれの帰路についた。(夏目 重美記)

上位入選十句

落葉とてまだある余刀日を弾く 吉村春風子
天平の瓦に触れて冬ぬくし 松元 峯子
天平の枯野へつづく柱穴 高野 公一
冬陽受け欠けても笑う鬼瓦 根岸 敏三
裏表なき人とゐて朴落葉 秋山ふみ子

一人一句

こんこんと溢るる水や燕白し	関
はけ道の祠に祈る小春かな	根岸
存へて聴く千年の小春風	水野
山茶花や腕を組みたきお鷹道	稲吉
天平の歴史綾なす落葉踏む	河井 時子
べそかいた君が野菊であった頃	永井 潮
枯葉降る降る仕残したこといろ	山崎せつ子
咳やお薬師様の草の庭	大森 敦夫
残存の礎石の幾つ 枯葎	山口 楓子
舞ひ上がる紅葉一眼レフの中	藤原はる美
楼門にもたれてしばし小春の日	大槻 正茂
木の実降る時に饒舌武蔵人	石橋いろり
お鷹道光を彩に散る黄葉	中田とも子
枯葉連れ歩いて見るか東山道	石原 俊彦
尼寺の礎石あまたや冬うらら	夏目 重美
小春日のしゃれた子犬の二三匹	戸川 晟
水澄むや鯉の水輪の恋が窪	三浦 土火
お茶の花茶杓に盛りしころざし	大友 恭子
冬の日の箒目乾き門閉ざす	佐藤八重子
お鷹の道皇帝グリア高だかと	宮井 洋子
黄葉かつ散る銀杏の影に犬憩ふ	夏目 瑤

○ 次回の吟行会は5月11日(土)、府中市郷土の森にて行います。

死は一字生も一字や水の秋 高野 公一
 バス停のベンチの孤独そぞろ寒 石原 俊彦
 行く先は一本道や岳樺 根岸 操
 秋爽の午後古びたる帽洗ふ 水野 星閣
 雑踏にナフタリンの香そぞろ寒 佐藤八重子
 さ迷ひしよもつひらさか大花野 山口 楓子
 文化の日母は大正祖母明治 櫻本 愚草
 折り採りて妻にみやげじや猫じやらし 三浦 土火
 白露やワイングラスの啜り泣き 大友 恭子
 過去一つほぐすときめき夜半の月 飯田 玉記
 からすみを炙る手火鉢維新の夜 夏目 重美
 はぐれ雲空似の人を追いかけて 石橋いろり
 巻き上げし緞帳のごと秋簾 根岸 敏三

第11回 俳句研究会

11月24日(土) 立川市子ども未来センター
 担当幹事 永井潮 秋山ふみ子

佐々木克子 三浦土火
 石橋いろり 佐藤八重子
 根岸敏三 飛永百合子
 参加者 37名

★講話……夏目 瑠

「放浪の俳人 井上井月」

老いてゆくことにも手順返り花 越前 春生
 明日からのことは分からず葛湯吹く 根岸 操
 ななかまど八幡平を焼く如く 飯田 玉記

かたわらに時間が浮いて石路の花 山崎せつ子
 不忍の杭をあまさず百合鷗 長澤 義雄
 縁側は思い出す場所小六月 飛永百合子
 霜月の水の固さを掬ひけり 大友 恭子
 雪の夜や絵本の中へ深眠り 山口 楓子
 一茶忌やめつきり姿見ぬ雀 河井 時子
 こぼれ萩踏絵のように歩きけり 松元 峯子
 狐火の海までゆきてしずまりぬ 大槻 正茂
 わが友はいつも直球月冴ゆる 秋山ふみ子
 熱爛やまだある夢を話しもし 水落 清子
 なぜここに防犯カメラ小鳥来る 前田 弘
 勤労感謝の日鏡は嘘つかず 佐々木克子
 大蛇出て夜神楽の杜どつと沸く 亀津ひのとり
 息白し鏡に嘘と眩けば 淵田 芥門
 虎落笛厨の隅に火消壺 小山 健介
 神の留守家に富山の置き薬 稻吉 豊
 煮崩れぬやうに鱒を寝かせけり 永井 潮
 一陣の風に素直や枯芒 吉村春風子
 向かひ合ふ人の間の芒原 安達 昌代
 夕暮で厨に葱を刻む音 戸川 晟
 七五三鏡の好きになる兆し 佐藤八重子
 人寄せる十月桜満開に 根岸 敏三
 茶の花や僧坊尼坊相近く 水野 星閣
 冬の星ゆへなく涙あふれきし 三浦 土火
 栗の毬廃炉口開けどさと落つ 櫻本 愚草
 はさがけの赤かぶ五段手から手へ 白尾 幸子
 雲の帯北に尾をひく神の旅 関 梓

今のまま悠々気儘冬うらら 石原 俊彦
 罽雲まだまだ咲かず庭の茄子 川島 一夫
 地下道にうたうピアノの小春風 石橋いろり
 柿喰えば口に広がる故郷かな 中島 秀次
 鉄棒に噛みつかれてや霜柱 大森 敦夫
 秋たけてマドンナの星離りゆく 宮井 洋子
 石の間に生ひ冬すみれ何歌う 夏目 瑠
 金子兜太の声あるラジオ野分来る 小山 健介
 坪庭の白砂眩しき竹の春 夏目 重美

創立35周年記念合同句集
 『多摩のあけぼの』を刊行

当協会創立35周年の記念行事の一環として計画された、会員の合同句集『多摩のあけぼの・第7集』がこのたび刊行されました。昨年八月までに募集を行い、会員百七十五名の参加がありました。作品は、一人一ページにタイトルを付けた自選十二句を掲載、体裁、内容ともに見応えのある立派な句集です。

今回も、前回の第6集と同じように、参加費用を抑えるため、編集委員の皆さんにお願いして作品の入り、校正等を行い、一冊二〇〇円でお分けすることが出来ました。追加の注文も頂きましたが、まだ残部も若干ありますので、ご希望の方は事務局までご連絡ください。

事務局だより

★平成31年度定時総会 並びに陽春俳句会

日時 平成31年3月30日(土) 午後2時
会場 武蔵野スイングホール
JR武蔵境駅北口徒歩2分

(詳細は別紙をご覧ください)

★春の吟行会

日時 新元号1年5月11日(土)
場所 府中市郷土の森
交通 JR・京王線「分倍河原駅」より
バス6分

集合 郷土の森正門前10時
会場 博物館一階 会議室
(詳細は別紙をご覧ください)

★第37回多摩地区俳句大会

日時 新元号1年7月13日(土)
会場 武蔵野スイングホール
(JR武蔵境駅北口)

投句 二句一組 千円(何組でも可)
締切 新元号1年5月31日(金)
(詳細は別紙をご覧ください)

★会員の現況(12月末現在)

299名(正会員242名・一般会員57名)
☆新入会員 0名

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けて
おります。現代俳句協会会員で多摩地区に在
住の方は、会費は無料(申し込み手続き不
要。それ以外の方は年会費2千円です。
お問合せ・ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

◇◇◇ご案内◇◇◇

俳句研究会

第2回 2月23日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(同じ込みはがきの地図参照)

*講話 大森敦夫氏

第3回 3月16日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 高野公一氏

第4回 4月27日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 白尾幸子氏

(いずれも会費五百円、出句三句)

〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20センチ程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清信用紙と高

点句、出句された作品の成績、寸評等をリポ

ットとしてお送ります。

(投句先) 〒180-0006
武蔵野市中町3-29-19 蓮見 徳郎方

「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆ご活躍中の先輩を前に八十歳の坂が辛いとは
言い難い。でもこの先は「身軽」をキーワード
と自分に課した。年賀状も卒業。

☆三十代の頃、小澤實さんから「俳句は自然に
滲んでくる」と聴いたが、私には未だに無理。

よくここまですべてやって来れたものだと思う。(光)

☆一年の過ぎる早さは年々加速して、今年も
あつという間でした。一日一日を大切に過ごし

たいと改めて思うこの頃です。(百)

☆皆さんから送られる会報の原稿に、ひと言芳
いの言葉が添えられていることがあり、励ま

されてパソコンに向かっていきます。(せ)

☆春秋の吟行会は楽しみにしている人も多い
が、句会場の確保がなかなか難しく、同じ場所

に偏る傾向にある。石橋事業部長の頑張り以期
待して新たな吟行地も発掘したい。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

平成三十一年一月二十五日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒195-0055

町田市三輪緑山1-28-19

TEL 044-987-1716 稲吉 豊方

TEL 044-987-1716

印刷所

株式会社 清水工房
TEL 042-620-2626